淇園養要卷

昌平坂學問所
地

ロ七-13
1177
2

門口七18
1177
巻 2

淇園答要巻之中目録

岡氏藏書

皆川淇園 著

菅沼藏書
根本氏藏

一 士たるの心得の語りを事
二 士たるの道の事
三 士と庶人との道の別を事
四 孝之変
五 父祖の悪を従ふ変事
六 悖之事
七 忠之事
八 恕之事
九 信之事
十 敬之事
十一 恭之事
十二 倹之事
十三 遜之事
十四 遜之事
十五 譲之事
十六 恪之事

十七 敬の事
十八 慈の事
十九 恵の事
二十 智の事
廿一 勇の事
廿二 仁の事
廿三 義の事
廿四 寛の事
廿五 温の事
廿六 直の事
廿七 正の事
廿八 剛の事附強
廿九 良の事
三十 貞の事
卅一 廉の事
卅二 文の事
卅三 武の事
卅四 善の事
卅五 試の事
卅六 道の事
卅七 徳の事
卅八 元の事
卅九 和の事
四十 性の事
四十一 命の事

中之目録終

淇園答要巻之中

皆川淇園著

一 士ニ道ハ何の物ハ云ヒ尋ネ作ル所ハ百事中ハ
ハ先今世ニ士ハ大方甚愛心得遠ニ事有之
ハ其友ヲ今ヲ諸國藩中ニ諸士何ヒも其
先代各お恵ニ武功有ニハ有其子孫ヲ忘
の縁ヲ世襲して数代勤居中ハニ有面ニの心
得居中ハニヲ主人の家来たる友小士と云も
陽のお渡り居ヲ(と)お心掛ニ又士と云ハ授ヲ刀脇差
二本ヲ授ハ揃ニたるが士なり居中ハ

吏方ヲ武士の意ヨリ拡メテ天下治ムトシテ大政方ニ通ズル心得ニ出ル
是ハ此の外ニ無ル心得ニ出ル遠ク出ル天ヨ
リ民ヲ生ジタル時ハ四ツ有テ一ニハ是士二ツニハ
農三ツニハ工四ツニハ商ヨリ農ハ天下の人の為
ニ稼穡シテ穀食ヲ生ジ工ハ天下ニ人の為
ニ造作シテ器物ヲ生ジ商ハ天下の人の為ニ
貿易シテ貨財ヲ通ス独リ士ニ云ヒ之ヲ素
ヨリ大職ニ有ル所ヲ不謂ル主人ニ家業タ
ル所ニ士ト云ヒ此ハ人の奴僕婢妾ニ有ル者ハ皆

士ニ有ルヤ先祖武功有ニ依テハ子孫ニ士ヲ
ト云ヒ士の士タルヲ以テ之ニ子孫ハ先祖ニ倣リテ其
意ヲ以テ士ニ成ルヤ知リタル物ニヤ力ハ士ニ
意ヲ以テいたル力ヲ指スシテ寝入タル時ハ
士の意ヲ忘レ〳〵ニ離ル魂タルヲ云ヒ意ヲ
人身の内ニ有ル魂ヲハ士ト云ヒ意ヲ
外物ニ魂有リト云ヒハ其身内の魂ハ意ヲ
くるおと生タル魂ニ有レバ不ルヤ是ハ皆愚盲
不通の論ニ有ルヲヤ事情ニも通シタルト
見ル人も吏ニ成ル力振指のふしら〳〵振

格別なる流儀なる仕立を有するとなりて八当要の事
と心得うるなれも所謂八世上に流俗なる仕立て止
を得そしてそるるもの所謂たなりなる
沙汰変不易なりと思ふる事なれも或の説
なれは士の魂と云ふるハ所てなくして謂なる
所ふれた士ハ武を以て暴乱を去ける先殺戮
なく威を立る者なりり刀剣の所ハ其用なる
ける当要の器物なて士ハ片時も其なれを
用ふる事を忘ふ云ふるとの所なる真変
の義を示らんとて士の魂と云ふてなりと

云ふりなる説のなく暴乱も起ふ云ふ四海皆
徳化なる海波して格なの威を立る事も入用
なけ是を太平の代なハ士ハ四民の間に贅疣
のなくなる物なる紀或の云ふ所なる所なる
四海の徳化なる波して静なるも武士の武を
廃紀て威を立る事を忘ふ是なる所なる響
なる下に云ふて自然に暴乱もおこらず静謐
なる事を得なる物なりと世説の云ふ不ハ
必云ふる拙なれた拙なれハた云ふハ俗家なる憂
宕山の札を張りて火伏の祈禱とそるる

如し世礼を張りて行われハ長く失敗の患
なしとなす事なり是とても失敗の起る所き
時なれハ失体の礼ハ用ゐ難く武士武
を磨きても君上甚上甚徳を矣ひ汲ふ私
曲なくして甚下民の安きを得られハ[一本ママ]
心一致して幣弊皆んな世の時よ及ひて切と
も衛とも為るべしこれハ昔より礼の起り
たる代ハ武士なりしと云ふなる是
ハ世説も又深く思ふに此の強流なる所
先者く説き甚理なるもせよあてもなく

さ国豊なのめき説を教えて今日を暮すも
知ふさる事なり今日の農ハ今日のをの
人の為よ者天の日よ晒されを和を踊を
てもれう食を作り出し今日の工ハ今日のを
下の人れ為よ者見の力を渇して見う衣
服器用を作り出し人今日の商ハ今日のを下
の人の為小山海を渡海して国れう貨賊を
物易をるるなり士ハ国ハ弱今日の食
を食ひ今日の衣を[一本ママ]今日の貨賊をた衣
よして色うかく安樂なる先祖の[一本ママ]蔭主

人の恩澤なりとのこゝ思ひさて其用をこ事
不をとゝもこゝ国中の礼の乱りたる時は一番論
を案を人のるまゝて命を捨て討死をす
れいこゝ分の任ハ御ゐるまゝなりとこゝ思て南
今のこゝ下ハ太平なるに行ても云こゝ無礼の
事を行てよゝして其時の用ゐる者なりと
誇りのこゝ志る是ハ其云云お遠あるまゝき
の志こゝ家を逃んとハ云はれまゝきるま
是何也よもせよ行てもこゝ無礼を行てまゝ
て其時の用ゐ立物成るまゝの衣食をたゝ取

より志る事ハ譬へこゝ津波の歩時は此一村の人を
舟まて救ふ〳〵と云て山井お書れて居る舟
頭のめくなる者なる〳〵さ行〳〵ハ津波のう
たん時お出来りて救ふ屋きう津波の家も
見〳〵さ行お空撓を云ひて今日の衣食を費
するハ先祖の事ハ先祖の事ゝして今日
の所業一こゝ不義なる〳〵一是お俗論ハ皆
四民の内の士こゝ本職と考ふ〳〵て古義を
知ふすゝして明る道理もこゝ抜け白を
さこゝて世を欺こゝ其暮す事なりたる

ものなり古の士なる者義を尚ぶなり何ぞ倫理より子路の向（向）の何如斯可謂之士矣子曰切々偲々怡々如也可謂士矣朋友切々偲々兄弟怡々と言へり凡士は四民の一の名なり天子諸侯大夫も皆士なり天子諸侯大夫も爵位なり故に儀礼には天子の元子猶士也と云へり猶子とはやとりなるなりと云ふ義なり士の爵位を得る亦此の如し士と云ふものなれば民をあんするを志として其ふちを事とする者を民をあんする

と云ふ事は乱世には干戈矢石を冒し暴悪を除き伐て民の患難を救ひ治世には其分に義を弘めて三民の表準となる事を心掛くるを士と云ふ故に朋友には切々として諫め偲ぶとして苦く厚（厚）く兄弟には天倫の和を失はざる為に怡々として欲して怡ぶとして容受なる事を勤め剛柔に徳を修めて其時宜を行ふ故に士と謂ふ亟と云ふなり子貢の問に何如斯可謂之士矣子曰行己有恥使於四方不辱君命可

謂士矣是ハ其人の德器任するに堪る事とハ
てするにいうまも堪能すべきよ是るこの
を士と云ふまして名節を重んじ云食
苟せず君命を受て使命あるに君命に
生りて死を致す事其命のめくさる事
能はさるを命を辱むと云ふまるこの今
己を捨て恥なりて必ず死を致して後やむ
者を士と云ふと云ふ行已有耻とハ
子張曰士見危致命見得思義祭思敬喪
思哀其可已矣と云ふまして思ひ見るべし

さ穀ハ道義を重んして身の安きを思はさる
ものなりされハ右のめ記ひハ出来ひ死故
に士而懷居不足以為士矣と云ふ士志
於道而恥德衣惡食者未足与議也と云
ふも同し意味なり曾子の語に士不可
以不弘毅任重而道遠仁以為己任不亦重乎
死而後已不亦遠乎と云ふ是ハ士なる志
甚重き荷を負せんとする志なる自分其内
德を弘大なせすハなるべき事をやり分る
ものなる者なるなる故小剛毅なせすハ

何ぞ〳〵こゝに至れりと云ハ仁のすゝりやり付
るとハ死すとハ其仁のすゝりすを見捨よやり付る
すを云ふ扱穀とりつとゝふゝりされハ士
ゝゝふゝの心ハ其世のめゝき志を立く其分試
其変よ変する志を士と云ふるゝり御れ
た荘の人其志の記りたるゝ所ゝ生
れ付よて世情ゝり辞言ハ未ゝ何の故よ未と
ゝり第ゝ何の故よ第ゝとゝれるを知るべゝふ
さるめし農の農を好ゝて稼穡を業とし工
の工を好ゝて造作を業とし高の高を好ゝて貿

易を業とするゝめゝゝものよて浪人をして
居ても士ハ士ゝり主人をとりて奉公をし常
刀を佩ふ形ゝよ士とゝるゝる事を得とゝふよ
ゝゝゝふゝさるゝりさて世士たるの志を立た
るゝゝゝ子も諸侯も大夫も皆是を以て
其本地としてゝ子にハゝゝゝゝの任あり諸侯
よハ治侯の任ゝり大夫よハ大夫の任ゝるをハ
其別とゝて中よもゝゝ子ハ王尊諸侯ハゝゝ次
ゝりゝの命を得治ゝふゝゝゝ終ハ其位よ
居る事を得ゝて大夫ゝゝ政を執りて民人を

安んずるの任ゆて志らも其材德を以て其位
ゆすむるを得つべきを以て士は君子大夫の位ふ
為る事を得つべきの德を其身ゆるすを道
として是を学ぶ其德も則所謂君子の德る
り君子の德のゆるる式易論語孟子ゆて
此考この外如い事こ数右のめぐく士は君子法度大
夫と同し志の本地ゆれた人倫の度ゆは別
ゆ大義と云ふものなりてて命のなる所の
君子法度ゆ俗り仕つて君と勢さ迫は其義を
考ふ者とゆる事ゆる故ゆ子路の語ゆ不仕

義と云つりされは義なるよりて君臣た
れた其君ゆ命ゆられて取扱ふ事ゆ所の官
事は則其身ゆ分ゆる天分の事ゆり易の
蠱の卦の上九ゆ不事王侯高尚其事と云
ふは則世ゆて王侯の為ゆ世事を取扱と
せずして其事は直ゆ直ゆより命せられたる
事と云ふとゆり禮の表記も世語を居る
の度ゆ合せて是を引事ゆ後世の偽説ゆ
は德者の事の根ゆ流れたるは謬説ゆり士た
るの道ゆ世ゆる道者故ゆ仕の道理を以

ておしてえいはせも源人して仕へめとゝふ
事はなゝ等之されたる是は財と智とをもはなる
ゝるれは或は一藝よりも云ゆゝうる庶しさて
士ゝるものゝ子孫世ゝ士ゝる農工たるものゝ
子孫の世ゝ農工ゝるめゝ者なれは志を狂け
ても其父祖の業を絶さて勉強せさゝ也は叶
はぬゝゝ其先代の士の道を守ゝる拘るりと
知りさりし等是悲もるゝゝるりかゝる
拘と知りたるゝ士よりも其非を改先さる等ふ
義の忘りるりふ義の忘りるる変る者を

変せるゝゝの能も悪事とこの死思ひい
第書よりを以士ゝるの原詳より等育之場
たゝ士ゝる身分の今日の学問の行ひ心得き
義よりゝりこの中変未ゝらと知分禄雖
中身今一意この中を自形は士ゝ家者は朝
夕道義の御る庶ゝを求先刻て其禄を
家者よ行動て其徳を成就して庶民の模
範とるゝん事をのゝ此この事は其者
分の當りゝるゝて假ゝも身を安逸小等ん
とし富貴を羨ゝ貧窮を恐む心を起す

屈するにさて其德を成就する事を勉強してはりを起を成就せす智を度むる事ハ学問よりさらに無き出来かたしと可恩百ハ士ハ国の分分の當りまへの而元来安民の事ハ其職分のみて主人の中付よりて勤るよりハ治を依て功有ゝ者を加恩賞おを心ゝるる決て有之事なり後漢の馮異と申將軍を戰陣の功よ褒らすして恩賞の時常よ大樹の下よ引離れて居りたる者を名を職分を勿論る故なり也

法とす面を事之士と庶人との分の事略お知る中ハ得ともも今一應中至ハ拙社伝述ハ形ハ世義を先人の道と申事を御為ち江之ハて其分明なり難くハ凡人ハ之地の中和の業を請く生ハ出たるものの故よ形を百姓信の分れ有る其道を一和よ治するよ成ハ之ハ故よ士を民を治め安んする事を紀して農を士を者ひ又（なかつて 以前）の為よ食を出す六士よ設せられて又天下の為よ兵加を出す商も又

士ハ役者ニ成て天下の為ニ戦を通すべき事ハ
四民の業のお輔相養ふのすべきこと出来る事
を往古より人々云合皆分て也て此四民の別とな
ると云ふ所ハ天地の自然にて此四民の別とな
りてお輔書皆りて父子君臣夫婦長幼朋友
の道も亦皆お輔書ハるるを道と世るもの
なり此輔書ハ学ぶを勉強して行ふを仁と
云お輔書ハるるを知て自分を見て自りて其
宜きを論ふ度量を義と云ふ左ハ仁義
を人の道なると云ふ事なり礼の表記ハ

子言之仁者天下之表也義者天下之制也報
者天下之利也と云へる語なり是ハ仁の其分
を勉強して義ハ後ひ行ふ事ハ天下の人々の
表ハ立ぬ所のものなり其後ひ行ふ所を已
ら心ハて自分々々の相意を見量りて其分
とする事ハ天下の人々の制度を主る所の
ものなり仁義ハ後へハ各其報を得る所ハ
士ハ三民より出ぬを報して食色所々しめ
て又是ハ役を執り三民士より是を報して
是の郡を教ひ是を教へてあるべしむ是天

下の人々の利益する所の者なりと云ふべし
是四民の道元来皆此世界なる物なるを士は
ハ常産なくして衣食の憂なし孟子にも無
恒産而有恒心唯士為能と云へる是なり三
民等常産なくして衣食の営に心
身を労する事なり公身を労する事を
苦むるなり故に士よりて或は仁義の道を
忘れて己獨利を貪ふ世なんと云ふ事何
りぬ世なれハ乎礼を生する故に士ハ是を治
免て和順する事を教申す教申す人は礼

懇有るハ人に教申る事なり是を常
に礼制によりて其身を修する事を入用なり
三民等家業に暇なく捨れをいて父母妻子
を養ふ故に一に礼制に従ふ事能はずして
只孝悌忠信を矢ハさる事を要として其
此の制等出る也君上に仰き聴き而已是の
士と庶人との道の区別なりとこの所居なり
孝と申事ハ行ふ心得の所なり故に孝行誠ひ
る所ハ孝と申徳等凡人に所有等其天性
に必ず徳に従ふの情有るものにて人倫の

和漢共生民の為に
人倫下庶人に至る迄
其の德して
御先代よりの
法制に
ひ有之時も下民の心に
に安らに
ふ為に
る根に
も捷き
和漢共に為政者德を上
人倫を叶へ
庶人も
御先代よりの
祖例を奉し
御先代よりの
法を
に
心次第
に
何事の
形
に
離れて
恩
御先祖
の
心持を
大切に
恩
の
一つ
に
自然に
法り
行ふ
庶

諸庶も
御先代よりの
祖例に
朝貢
職
怠なく
恐なく
法
に
の
國
自然に
靜に
有之
大夫も
祖例を
して
禮制を
命ぜ
時
甚
祖下の
法士も
自ら
形
卑
根
助
甚
命せられる
職に
法
士も
又先代の
祖例を
忘
甚
方を
法
士
際に
省
事
この
庶人も
甚
祖の
産業を
墾
根に
懈怠なく
勤
甚
家人を
ひ子孫も
怠
根

世孝と申すもの心得と其父母を愛するより
始まる事にて愛する所よりよく敬する事よ
りも愛敬の所よりよく事へて順にして又終身
にも其父祖の心を忘れぬるよりはいかにも
子たるものたり物をもとと身の慾をと棄
て朝夕に父母の心のかくあるべしと云ふ変に
心を注ぎて其主を忘れずして順に走る後
ふを孝と云ふ事と可申思召し
父祖の心を思ひ愛人を其愛敬に従ふを孝と
する式と申候然共此孝は

愛敬に従ふ事を有之百姓事には孝の父
祖の心を敬して順従を施しと云ふ常に
よりて云事なり凡そ下の人の父母に
対する心の常は其子の形未人並に生立て
天の智を弱くすれば人に情生れず一生を送
り子孫も繁業を怠り変思ふて下の人の
父母たるべの常に情なりと可申思召し是
心を人情の常なる主を人と心有る所なり
世心を八目當にして其愛敬を見付し
時を称めはするに子たる者の道にて此孝は

存道より中に得たる士夫の父母庶人の心にあるも父母の心より発義を考ひても一生を送りる孫繁栄さうせ変易よりよりていろを養之又其子諸養の父祖の出心より財産より百性の雑義よりなるとやうり旧例旧格を守れこうしと易ひ行ふ心のあるこを極るしかの事発急角技術をもて見出ふ産ふ事よりて出産ふ情と中事発ぬ行根より心得こ中ふと出産ふ作成形成ふ此の善物を生しふの常其同形の内よりて先するこの発大よりて主と長とる

り後出たるこの小よりて大よりて長こるこのよ行ふ事物の常理こ出産ふ分其同類の内よりて小部より多数の長したる者発れを敬ひて接出この為より後をとるる形ありるこの遜出ひこ常理と可出思ふ形理を忘出て先智を特と彼部より先おとり智おとりたるとて長者を遠く事ハなるこうらさふ事より但し世情と中る発老を敬するとこふとこ其之味多しお遠ふる事よりて老人発已より事を強こる事も

交られいとして其事を大切にして其心を
交ふよりこれを益と得ることなしらふ
事にて長たを致すべき心と考おし未遠
有る事とこの所忠信にて
忠信おの類の義を略中を以根底にして
所以忠と云ふ人の為に事を思ひ計る時
さるうらこの身の事の根に云ふ所を一の
為に思ひを尽しうくく思ひ得ることの事の
也を彼に云ふ所ひ解ん事を思ふ所に
位にしらひて敬き意をはふ忠とする事

なり忠と云ふ意是に反して人家の分事隔を
皆すして人の事とも家事のめく心に深切
に其義を思ひ是非恩を所へてめくさす
敬ふる紀を忠と云ふなり古人君より民
の事を深り思ひて家身の事のめく思ふ
をも忠と称せる事なり朋友の深切にして
情をはますして見付ることの利害を明ら
うふ為をも忠と称せり浮世人民の君に事
ふる身を思ひして立人の道に為をの
を忠と称する意古義を矣ひたる事

怒と云ふハ人の家事を交る心抔を我よくく思ひやりて家より始ひまゝと思ふる事を彼ふ施し行ハ敬ハさるる抔よりする抔を怨と云ふ

なり抔心抔抔羊羹人家の屋敷にて有ていハ其心

抔とこのす彼をハ家ぬく思ひて後ハ怨

乃事もなさるを抔ハ怨と云ふ

信と云ふハ其行の後ハもたうとをる〳〵事ハ

人ハ抔毋変思ひ心商てハせふるを信と言

ふなり家より言し詞をちう〳〵待た人ハ

ふみて信せさ事を信といいはす人より見を

信して後ハ信と称する事を得屋し抔抔

信と云るハ両抔行ハ一つハ事後ハ已の必

す其道ハ行ハ屋云ふ事をこうして位を綬

するとも信ハすると云ふ言を論て行

ふとも信と云ふ元人の相交るの道を略見

信と云ふものなるハよりて行事も行と

まて行事ハなるものゝ論語ハ子貢曰君

子信而後勞其民未信則以為謗己也と云

り武事を忠信と云ふる国信ハ見〳〵

なる抔ゝして上吏なる屋ゝ徳の名ゝ

敬と云ふ事心を用て物を取扱ふるゆゑ
らんとする德の名なり書経の洪範に敬用
五事として貌を恭しこうんすを思ひ言
ふを序に順ん事をおそれ視ては明を元
ん事を思ひ聽ては聰を思ん事を思ひ思
ふは其物の極るを知り得んるを思ふ敬
と云ふものゝ性五つの物に事皆己れ身に
ある不を去離して心の神妙の主用に能
くく根に生るゆゑ行ひ徳を生ずるが如く
事にて敬にて也事をよく天道に叶ふ事

にある所に至ては言敬必及天と云り
恭事已に心際の為にて厚く紀事をも敬て尚
らさ而のめくるを恭と称するを
にて古より有来りたる事を敬を用
すして地を祇すしてふを恭と云ひ己
に在る厚き位をも身分の德にふ相應る
れいとして敬て尚ふさるめくすをも恭と
云ふ是も回法と云ん一古を伝して行事
も自ら尚分にせさる事を貴ひて恭德
と称する事

十二 儉を何事をも物を用ゐることに八百人の位を進ム可キを五十人より二ケ五菜よりして食すると一ケ三菜よりするの類皆儉之又分の外をハ出ずこの中事も用ゐ[ちゃうゝ]ハしてなく事をも儉徳と云ふなり

十三 謙と云ふ恩百の外より我出ずを用法なるもとゝ云ふを謙と云ふなり

十四 遜とハ何時よりても其変を退る様より極ずすして言を出ずを言遜と云ふなり

十五 讓と云ふ分分の授り有す所位を避ずて人より[一本ノマヽ]ゆづらしゝ先又ゆづらせて人の有とするをハ讓と云ふ古傳より讓徳之主也と云國治よりゆづる徳莫如讓と云る何事よりても安逸なる事使利なる事榮名なるをを人より讓りて己ゆづる其下より能くをゆづると云りゆづる君子の徳業を初より有之安逸役利榮名を求るより心なくして唯天地の事物を寛優載慈育するの心の如くなるこの今讓るより分て其心得明白なる有より民其徳より服するをとなる是を徳

物う

莫如謹と云ふこゝのなり

十六 慎無物を軽扱ふよ易ひて仕為見為しる
き様よ心を付るを慎と云ふこ

十七 敏と無き為しして直よ其事を法と先
物を明て行ふ為を倫語よ敏則有切と云
事を為ふを主ハ何事も其切成就する事
を云り書乃康誥よも正則敏徳用康乃心
と云り事生事よ敏よして速事を常ハ
心よ明る事なく心安ふこのよして何事を
易ふよも其慮の意大よ及ふ厚紀を貴ひて

十八 称智り
為を物の行ひの合ふ所変ゆるこのもあく
て物を生出き様よする徳を慈
と云ふ若又たるこの意世易ひなくはの
ふうふさる事こ

十九 恵と者を愛より人のふ自由なるよ心を付
て或物を給り或ハ与ふ自由雖義のなき様
よ仕向をして行を恵と八云ふこ

二十 智と云ふこのハ物を見て其物の根接情
実及其用の発する而世のあき者なりと

ゝふ事を見ておりて志ある性たゞ紀を家
よ具しゝるを智と云ふ事まて世智ハ事ホ
老孫し又ハ学識よ廣き人ゝ其物と其能
の物の方用よりて行ひ皆て後よ世働の用
をは得る事なり又一種其心ホて靈通ホ
して自然よ物の陰微を感しこうゝせて知
るもの可也其是法則とす色紀よ等
ゝ学を好ハ智と云ふものよを
事を得るを孔子も道ゝ学とは
好を知ハ自然よ智と云ふものとの比

得と存ハ又世間の俗智よ黙智と云ふもの
ゝりて家もそなく智恵もそしりて利事
可也ともハ前よそしは者其後よふく明
らゝ為る方事大よ失するものよて小智淫
智を家ホの禍を引き身を亡ハ事も
ゝるものゝ為ゝ智ゝ遠大の智の重
人の大能よ合するものを貴ひて主腹の
智ゝ必しも情慾能冒数ハ
勇と云ふ事己の心の或ハ歩る変よて身を祝
よして能迄を出ものと云ふ君子の勇ゝ

義をむさぼるものこゝろ小人の富ハ血氣
の用を逞しくするのこゝろのゆゑにて
て世間とゝもゝの小人の己を視る不
彼ハ畢怯なるものなりと思ふんを恥
思ふ所なり何ぞも富家を奮ふ事なる
者之ありて所なる孔子も知恥近于富と云
ありされハ上なる人ハ下の民の家を
小富にゝんとするを恥を為事行
要之恥を御う第ん上とするにハ倣ふも支
と畢とし弱としてにゝんふ事なる

庵ゝうゝに畢弱ふして侍ハ即ち畢弱とな
る無民の情なりとこの所思ひに
仁德の事前ふ已ふ無しに得た前偏の説と
て大お遠の根ふ有ゝ之所を説略中を根所
仰下所ひ前偏ゝ論語ふ仁者愛人と云ふ
語ふ言仁必及人又仁文之愛也と云ふ接
て仁心之德愛之理也と云ふ解有之ひ拙也
古人の字已ふ對し却なる字ふて已骨惜ゝ
をせしして人の事を為ふ見於ゝくく
思ひて固ゝ勉強しして其為ふ事ふ強ゝ

と仁と云ふこなるものゝ小生産いとを形要とする而の人の字と棄て愛の字をこうりて仁の解といふこしい事以の外の誤りまて生産いに基て仁義と云ふも人たるの道まて人ふるその面ゝ事のこことまてを人の道と参中さぬ事なる然別まを一物を引出して愛とのこと云ふ事惠深なる見解之人の道と云ふ辨のなるまよりて人生の常まこうりて見い得を点人をこうり和補れ袁の事を以て考といふこして會歡の道とも唯是と以て異

とする事なまハ仁義の道甚内まなる事明白まに生産い易の繫辭まに一陰一陽之謂道繼之者善成之者性仁者見之謂之仁智者見之謂之智百姓日用而不知と云へり是彼れ補れ袁の唆の内まに仁義の道のなる事なるも百姓ハ是を用て自分仁義なる事を不知と云ふ義なり是まを換りて見い得を愛の理心を德と云ふ和偽の説の誤解甚明ふまれ分ま この中と春い甚分を世仁者長人安民の德と云へる説参禮の曲礼北

安民の文字と易の文言體仁足以長人と中文字とは取合皆て解と為しうる者小て其義殊更粗造なる事之其友ハ體仁足以長人とハ猶固飯を二ツ食ハ無足以充餓と云ふと同し論勢なり足以長人足以充餓と無此変の用ハ留ハ今ふと云ふ事なると固飯二ツをハ充餓の物なりと出よおし拙先て云ひて也四ツより以上ハ充ふたらぬ物となりて此又ハぬ事なりハ固飯無別ハ固飯の解なる屋く仁ハ別ハ仁の解なる

ことを其用と出ハ其解と云ふる事なる粗略ハて文理の當りを失ふり仁義無人の道なるを第偏ハ其りを明ハ解論りたる事ハ甚敬ふて敬て第偏の邪を挙るまて所ふ及ふるまて敬て第偏の邪を挙るまて所ふ義と云ふ事の是志別ハ略矣しハ得失ハ物人生の日用ハ甚〳〵入用の物なて初ふて叶ひさる物の名なる故今更ハ詳ハ中を以凡人の惑ハ從ひ利ハ付て其節度ハ迷むとする際て自ふ能く心ハ其止ハ

る〳〵さの分限を制し出して分を以て止
まるとハ義と云ふ事之人と人と賊を合る
ゟ禍を出来して淵ゟを為す事を禁する
と義と云ふる易の繫辭ゟ見へたり
大抵義と利と甚を云者ゟ義ゟ出れ
ハ自然利(ゟ)有ゟ義ハ利の是也と云ふ
事も有之ハ志のしゟ己ゟ利すくして無
義ゟなると中事ハ義と利の合す
る不者のなくなる者有ゟ因〳〵一事なる也
若子より是を見ハ義ゟすべき道理

ゟ見へ小人より是を見ハ利ゟ出べき
道理ゟ見へ中物なり孔子の君子喻於義小
人喻於利と云給へるも即此道理之義なる
りと心得ハ多之義くハ皆金銀を溜め
積の者と何の差別もなくなる正義な
と思ひ義ゟよりてもなく金銀を使ひて費す
者ハ何の差別もなく放蕩怠惰なる人の
極ゟ思へるハ所謂利の義ゟ欲ゟ出ぬるなり
よて年貢ハ二都の内ゟ高人多し士ハ大卒
を高ゟ給を仰きて高人を義多ひ高

人種異なる者ハ多くこれ変化しと思ひ
士たるの任務なる故に士の心も右高
人因為なりたる志之風俗の次第漸変
なり深落なる事も是この如とする故
と云ふべきハ流行変事なれハ何事も
為の物なるなれハ立離れて孤下
独公の道理を以て何てなる其時に相変
遷を生ずるなり為と云ふ利ハ拘泥ハ意
物を迎ふるく為の心をや先て男者を為
ひ己れ私の物を捨て君の為ハ力を尽し

己れ安逸を欲せずして長者を敬する事の
新出来ハ中ハ義ハ中なりとの次思ひ
寛と為物を交いるの量の由なりとして
解りなるを寛と云ふ上なる人己れ物好を
出さずして彼の振る舞を容ようる
事容るの寛徳なる事ハ彼物を張寛めて
是を駆する事能ハず是器量の偏
狭なる故之偏狭なる扱ハ彼ハ流ハ
しなこの事なし故ハ孔子も居士上不寛吾
何以観之哉と云ふ所なる事なり

十五

温と云ふ意故例を心に託して忘れ難き義と
心をとむるを温と云ふ又顔色の嚴性なる
人口にくちぬ程に心かくるを色温と称す緊
なるに因て心持なり

十六

直と云ふハ物のひろくすんなとある物
にあるを直と云ふ物直に二道なり
小人ハ道をたちさるる故に血脈の性の育術な
るを色事なに言ふなり是を直
と覚へ居たり是ハ論語に不得直躬の者の
言文の年を攘ぬるを而授人に告事

十七

なるの義なり君子の生意人の性命と人の
道と云ふ物の何なる事を知りて其心の通を
心面に生じて言ふとすれを直と云へ
り知らざるものハ是を偽の根
に居つる故なり人の上なる人ハ代変を無
へ知りて生性命の道の直道の立川根に
る事民下を御するの要術と可謂思ひ
而と云ハ物の志向なる事と大学の心ハ其心入
の緒処のなるなりて邪なきを正心と云ふ
事之心顔色と云ふ事意顔色に物を志

文よりして作成逆らの〻気〻味見へぬ様にする
を云へり今の世の学者等色莊なるを正
顔色と心得正顔色ハ帰ち正心の事と心
得違るも所詮故に世上にもたゞ志ある
る顔付をする者を学者と心得居る様
なるを一り渉百変るゆえ
剛と毅相まじりてすくやかなるを
云ふなれども毅を剛なりとして取せぬをのり
なるなくを剛と云ふ因易に象傳に多く
剛中と云ふ事を云へり此剛中と云ふ事

其大事の文字之上より下を治むるハ直道
と云ふ相を上下よりの目当として不直なる
ハ上なる者も下の志なるゆ所頼て道この直
なれハ何方にも其理なり立ぬ事をハ下民
ゆ丈夫ゆ居ひ入さなる様ゆるし由事ハ下
民なる志を直道を以て上を抑へて自相を
せんとて面々ゆ道理を吟味して其中心ゆ剛
なるる何色にも直道ゆ伸ハ得を剛中と云
ふ者なるを可知居ハ公事訴訟の類ハ
も剛中なる者ハ役人ゆ賄賂を貪ハ言語も

家作なる松より人松なる者より出心を生ずる所
なり弦と云ふ事を云ふて其割なるを
松なるべし曰く事之
良と云ふ物の来の遂なる性根の後なりて其面
なるを良といふ良馬を云ふ良子を云ふと
なる馬之良某を云ふ那其病を癒す薬なり
良人を来の遂事て借老となる所を支を
称する事なり

貞とハ他の来ハ家より凶あるより松伯之なり
ハ凶まぬ故より貞松なると称ス貞の字を以て

御合点可ス成ハ婦人の実より見へたるを貞
と称する歟を云ふく夫死すを迎
嫁する事なるより凶しかるを所故より貞と
称ス男子も患難より節を変せ
ぬを貞と云ふ易の元亨利貞の貞ハ何
も生生も凶〳〵操よして如〳〵奴事を云り

廉と云ふハ己を守る所を廉を分
際取る所を廉と云ふ所之
文と云ふて其廉隅を矢と云ふ所之
文と云ふハ世よてハ物の文所なるを文と称し文字
文章とハ文と称ス也古ハ人の物中の名

の條理の立ちたるを八文と称し倫理を文
子文章と云へる形色の文章文字の文も
其元を右ら人の胸中の文より成る字文なる
るの辭章之禮乗の制まて五倫の物宜等也
くまの條理うちこの五一て立てるを礼乗の文と
云へとて世文德といへ物い礼乗の文より外
さて間を外まし思を害ますも一八其文う胸
中の神理まを含して活動し活動也也一八其
條理う枝葉を繁生して何すも其理う
まより一條理となる色を文德と云へ事之

色文の文も色と同し事之と可知思古以
武と云へ色敬まを以て本為りて古也を
禦くの德を武と云へ惡敬物まを出合ても
甚素の逃る事なくして物也を御示れと
ひるたくまして吹心をて也を刀劍の藝まを
て物也を物出れ成まを武藝とも云へるる
屈しさ也古の古史八文とも武とも能撥
殊して治平まを八民を治め軍事まるを八其軍ふ
將ゝる人多し浮世まを晋の羊祜を軍
ふ臨ひまを甲冑を着ひ事るくして彊兵を

抑〻こゝ三国の諸葛亮も弓剣刀槍の誓
古をたゝる事無き未聊り及ぶさまを天下
三分の基業を創めて八陣を布きて魏の
名将の司馬懿を屈せり士大夫の武徳なる
し事業を施すと云ふは是又文徳よりて
て深略を定め深略よりて勇決をおす
事まてゝゝるゝは武藝の誓吉よハゝる屈の
らは何ぞも仕るよりて勉強するよ習ふさ
神ハ武徳も成就しつゝゝる屈しと為ん事
は産い

善とハ物の止まるゝゝ止る事なるゝ
て為る根子を云ふと云ふ人の性善道義よ
云ふる答の物成よ性善と云ふ人の自分
の怨よ常らすして道義よ従ふと云人と
云ひて言行を云言行と云ふ其云ふも
大小有りて其評論よ及ぶすして云ふる
を云ふと云ふすれハ云の玄極ハ文勢
人の其事よりて生活を為る不ゝ玄云
なり浮世仏家の流配りてより仏法よ依
して是を修し尝塔を建立し僧尼よ布施

し或ハ魚鳥の類を殺生する事を八邪淫と云其事の冥論(冥福)より出ていとして其根と称する故なりと云ふ事ハ有(右)と称する事の外ハ多くハ紀事なりと思へる人多し親を喪ひ氏を忘むる(お)の名の名を得る所なり尚なるを知らず是ハ文盲よりて感ずる事の甚愛なりと可謂思ひ

偖と云ふ事ハ其形の久変す且た諭こそるよりて其中のくるるを抜ぬ所なるを捨て云ふの名ハ四時の寒暑の形ちるよ或ハ先達歎

後生てくるひくるる拙なれた始終の不変を寒とるり暑ハ暑者とるりて学ふ事なきを称して徳ハ其の道なりと云へり人ら乃の徳のめくよ多生事ぬ物反よ学を固く執りて易へさる拙よしてもくを滅之者人之道之也と云へり書を積先は性と熟して主徳ら成就するを誠と云へり易ニ文言傳よ修辞(辞)立其徳と云ふハ心よ学へたる古人の義を云へる辞を時ら思ひ出して忘生ぬ拙よ主生は徳ハ発生よりて立た反よ

云弱きものゝ

道とハ天の一陰一陽ゝゝゝゝさゝを常と云ふ様也よりして人事まて
も万の成し出さたるをハ総而て物を
道と云ふ君子の道といふ者君子の徳物
よりて物のおしかゝゝゝゝ各ゝ
様れ多く亘しきをしかるに人の乏道
の物をるゝ云ふ事を甚おしかゝゝゝこの通りよ
りなく活物ゝ人心よ物をるゝを云ふ事よ
てゝ下の人ゝの公ゝ自ゝ道よ法ふ公いきよ

ありて云公の出るを道物をゝと云事
なり

徳と云ふハ六ケ敷物なり已上よ中述る孝
ゝ以下の各物の皆徳物と云ふ物まて書
經酒誥中よ厳心藏聰祖孝之辭訓誡小
大徳と云る所の大小の徳之古ハ是の徳の事
を以て小子よ訓し教ゝ世たる物と見出さて
徳と云ふ者ハ此教の物をするふの云心い
きの物をるゝ云ふ所を云ふ徳者ハ代のめさ
公持世徳ハ代のめさ心持として心よ貴ハ居る

を之心持よりして行ふハ即ち德の行と云ふ
物なる故に存し心に貫へ来る德性の心持の
極極なる物をも德と称す孔子の德之不修
と云はるる事を德性の心物の極極の通を
心にも思ひ行ひにも出して忘れぬ極ます
る事を德とハ修すと云ふ其修ますると
不修と云ふことを其心持の通りを修し得て
心の癖となりたる德性と云ふ事之易の
繫辭に成性存々道義之門と云り此成
性存々を則修德の事と可思百

世八

元と云ふハ易に所りて乾元坤元所り則第
物を生する根元なる物之元德と云ふ民
下を引すへて示る首とする極まる称
ハ名なる若德を称して元德所る若を元
后とも云ふ事之

世九

和と云ふ事を極大切の文字之也百の第
物を敢事子孫第別なる生を中庸のすふる
而まよりて生活して自然に其用をお成
し名生を達する物まして人と人とハ互
和情和書の道よりて名生を達する

事を得るものなり治むる志ハこゝ治先て物
而の目當ハ大和を敬する事を肝要とし易
こゝ文言を保合大和と云へるハ即世事を云
ものゝこゝされハ礼ハ禮楽も刑政も並を皆大和
を合掌んとするの役事なるを世ハ世変をこゝ市
く屈さ事なるを世ハ是非も邪正も弁論も評
議も入〳〵さるるゝ道を知らさる人無俗を
正しくせんとのゝ物ゝ正しくするの目
當ハ大和なる事を知らされハ節を偏を
して和を失ひ屈し〳〵莊子を云る儵忽の二

帝ハ混沌氏の七竅を所事たるハ七日をして
混沌死ぬるとこゝふの物を為るゝしと注海ハ
性ハ物の心物の常所なりて人より識り定めら
るゝ而の癖を云ふ名を元来の物の名を
所〳〵さるを漢信をうしして心中を性性と云
ふの一物なりて性れら動事る物を物を
偽りこゝして性性と云ふ所の是人こゝを分
て云へを子是弟別同しこのふさ是を引すへ
て見是を是子是弟別るるハ皆一軌轍を離
是ハして極りこゝる癖所るものゝ是を稲を

稼この別を行ふ者ハ冬月ハ稼ぎて暑を避く
法ハ熟する者ハ何れも皆同しきうめく人
の血筋の性ハ極りなくして正もなり邪もなれ
ハ本何たるまりたるを知りて心を好き邪を
惡むハ因し事こ有ハ惡を作せるものハ
家族すハ恥入て家色赤くなり盗賊を
為せるものハ刑戮ハ源にて首を延てカを交
く是ハ性善なる性微なり稲の性を知ふ事
ハ稲を稼穡するを雑く馬の性を知ふされ
ハるを畜ハ事雑きうめく民の性を知ふされハ

民を牧するるかし雑き故ハ性の論を云
ハ事ハしてを撫する不を人ての性ハ何
りすして流を合智ふの性をハ論する
事なるを法世の儒者ハ其事ハ治国の為
求めたるを知ふして自己の心を廣こ
の目前と思ひ邪ハ求めて知る庶ふるを
ハ内ハ求めて元を得んとして竟ハ是ハ
りて語りて德性ハ皆己ふ内ハ具りたるを
のと思ひ聖経を明とせ法して理を法して
地ハ本ハうすして心を主とハ是本の語り

まゝりて事を除こて永こを立るる爲
程伊川蘇東坡蜀洛の黨の爭をし先
米晦庵の陸象山と湖の四書より心を其
若き抵すもこゝ徳を拒こたる新婦世其
學流の人まも玉風を立き極を見四体を
久む爲く悲む爲き事を海
命と云ふ事古聖話動したる物として説者
り詩經小雅正月の篇を天之抗我如不克我克
彼求我則如不我得執我仇仇(音キウ)然不我力と云
て見い人自ら心中を顧ミハ天の命の我

心試四すり動こする所るこの我を我れの自由
を爲セサ留うめく彼ものこゝの家を示す外の
若を則ちこ可志と求むる心持を我を通り
をする事を治さるこのめし家を離れ
治法付事をセしもこ家をつくめさせる事
まもセこと云ふ事をして見無人の子さる
志の心の内を考ふハ行ふ人さるりと思
心を常を心の庭を付き思りて離れ盜
賊をしても盜賊ハ寸後し紀事をりと思ふ
心庭を心の庭を付き思りて離れ盜

と命と云り小小雅小宛の篇より人之齊聖飲
酒温克彼彼昏不知壹醉日富各敎示爾儀天命
不又とあり是ハ人の齊聖なるものハ酒
をのゝてもあ儀を忘ましくとして支
とやりとをる事なるゝ彼智の昏きハ天命の
其温克の内よりあるを知ずして支之より
きハ天命の支温克の内よりあるを知ずして
支之より碎るハ性よりして出之より出せ付て
毎日より悪変ゝせよ富むるより是より豊安人
の得失の而を見ゝて各ホの形像を慎む

〳〵慎む在しと思ふ而を取ハ法して八慎む
〳〵と云ふのもの命ハ又とハ必よ来ずして
次第より悪変なる〳〵と云ふ事ふて古の
天命を云〳〵る而ハ氏のめぐく今の心内より活動
しなる而よて指して命と云〳〵り後備初
生の時よりより命せられて仁義禮智信
の五常の性を受て其五常ゝ心より流行すと
云〳〵り而よ性をハ理なりと云ふ事よりり
たり初生の娠(妊)より天より受て支源ハ人の心の内
より指切よりりて支のの命ハ通せずして性の理

この流行すると云ふ事甚だ不便の筋之人
の口鼻より出る息は皆命を通ずると云
ふ可きなり命の流行を知る處
事理性の流行理の流行と云ふ古人よ
り受けぬ事之惜しむ千のめきを拘して心の用を
始終棄て顧ざる拘と常るカや不通基窟の
徧と云ふ處し是宗徧の徧ハ右のめきを拘ふ
る故を是理を省察して存ずる也聖人
を要る處しと云ふり古人の義を八代のめ
きの學法なるし待大雅抑之篇を評謨定命遠

猶辰告と云ふり學を從ひて道を知り評を漢
りて己の命ハめ世を知るものなりと定む也ハ遠き
敵をも命ゝ知りて時を通りて告ふしと云ふ
事之是を以て宋儒の學法の本遠所を知
ず以漢儒より以来ケ程の徧誤多き事も
易の大極を儀式生ずと云ふを誤解し
たるより起る事と学んで易の大極
の解の誤りと中る事長く以後略し為退
日可中を以以上

淇園答要卷之中終